

| | |
|---------------|-------------------------------|
| 発表タイトル | 植民地と医学 －日本統治下朝鮮における医学者の足跡－ |
| 発表者所属名 | 国際日本研究専攻 教授 |
| 発表者氏名 | 松田 利彦 |

はじめに

学術研究は政治とどのような関係をもってきたのか。あるいは、学問は政治と無縁でいられるのか。私は、この問題を、日本の統治下におかれていた朝鮮・台湾を題材に考えている。従来、学術研究と植民地主義の関係という問題をめぐっては、たとえば植民地大学（京城帝国大学・台北帝国大学）での歴史学や語学研究などが批判の俎上に上げられてきた。それでは、医学のような実学には政治的文脈との関係すなわち植民地支配への加担というような問題は起こりえないのだろうか。

東京帝大系と北里系

西洋医学を摂取した明治以降の日本の医学は、人脈的に大きく二つに分けられる。一つは東京帝国大学を頂点とする官学アカデミズムである。もう一つは、北里柴三郎の伝染病研究所（後の北里研究所）の系統であり福沢諭吉の支援も受けていた。両者の対立には文部省と内務省の管轄争いも絡まっている。

このような近代医学の展開と分岐が進んだ時代は、また、日本の海外拡張の時代でもあった。日本は台湾から関東州・朝鮮へと版図を拡張していくが、帝国のフロンティアで西洋医学の新領土にもたらず役割を担ったのは主に北里系だった。

植民地医学への評価

植民地における医療事業は、従来医学者自身によってわずかに顧みられてきたのみで、多くは、植民地の近代化に貢献したと評価している。しかし歴史学研究においても近年、英国のインド支配における医療衛生政策の研究をはじめ、世界的にこの分野に対する研究がすすめられている。そこでは、医療衛生政策が、植民地支配者が現地住民と意思疎通する回路として機能したこと、また、医療事業が西欧的衛生観念を植えつける役割を果たしたことが強調されている。

志賀潔と朝鮮

日本の植民地で医療衛生にたずさわった人物としてもっとも有名なのは、赤痢菌の発見者で北里柴三郎の弟子でもある志賀潔だろう。志賀は、1920年から10年あまり、研究者としての後半生を朝鮮で過ごし、しかも医療衛生政策・医学教育研究を担う地位にあった。志賀自身は、純粋な学問研究を追究する「学究派」を自認していたが、植民地という磁場でそれは可能だったのか。志賀の朝鮮経験は、学問と社会の関係、学問の政治性を考える材料を私たちに提示している。